特集 マイワシ資源の変動と利用

第Ⅱ部. マイワシ漁業の展望

—今後のマイワシ漁業および資源管理はどうあるべきか—

Ⅱ-1. 不確実性に関する共通理解が必要

青木保男^a

水産庁漁港漁場整備部計画課調査班

Common understanding on uncertainty is required

YASUO AOKI^a

*Fisheries Infrastructure Department, Fisheries Agency,
Kasumigaseki, Chiyoda, Tokyo 100-8907, Japan*

水産庁が毎年実施する資源評価で、漁業者等からTAC 魚種のABC 算定について毎回批判が出される。

平成16年度のマイワシ対馬暖流系群の評価の例では、資源評価会議で漁業者団体から「禁漁にしようが、自由にとらせようが、資源は衰退期には増えず、上昇期になって初めて増大する」との意見が出された。最近では「そもそも資源評価は信用できない」との批判が度々である。

このように、資源評価の策定過程で研究サイド（水産庁漁場資源課及び舩水産総合研究センター）と漁業者等が対立する構図が定常化しているが、この原因として挙げられるのが資源評価の「不確実性」である。

資源管理における不確実性について多屋¹⁾は「資源の変動は資源の『自律的変動』『自然環境による変動』『漁獲による影響』の三つによって起こる。資源変動を比喩的に言うと、資源種類ごとに変動の仕組みは異なるが、概ね前二者による影響が大きく『漁獲による影響』はこれらを加速する方向で働くと言っている。従って漁獲の管理は必要不可欠であるが、それによって資源の水準が保証されるものではない」と述べている。

また、川崎²⁾は社会政治学者グランツ (Glantz, 1992) の「たとえ互いに対立しないとしても資源レベルについての認識はさまざまなので、科学的研究は（海洋生物資源が崩壊してしまうまでは！）こういった紛争を解決するには役立たないのかもしれない」との言を示しつつ、「『不確実』という批判に対して『不確実性』を取り除くという方向で努力しても、あまり効果がない」、「『科学』を『政治』から切り離し、『政治』が『科学』の出した結論を尊重する、というルールを造りだす以外には解決の方向はない」とした。そして、そのような観点から、

地球温暖化議論におけるIPCCの活動を高く評価した。

私自身も「不確実性」がいつの日か完全解消するとは考えておらず、対立解消に頭を悩ませている。

こうしたなか、科学技術社会論の視点から、地球温暖化問題等々における科学者の社会的責任と、科学技術の関与する公共での意思決定について、藤垣³⁾は「作られつつあり、書き換えられつつある、という『柔軟性のある』科学観をもとに、意思決定のしくみを再アレンジし、そのときの責任境界を新たに考える必要がある」「科学的知見は今まさに作られつつあり、書き換えられる知識である。したがって科学的合理性も社会的合理性も変化しうる。我々は、この変化しうる性質を組み込んだシステム作りを考える必要がある」と述べた。そして、ジャーナル共同体（専門誌の編集・投稿・査読活動を行うコミュニティを指す³⁾）という閉鎖系を脱し、市民と科学者の間に生じているコミュニケーションギャップを埋め、現実の問題を解決するため、フレキシビリティを社会的意思決定に応用した例の一つとして「順応管理」を提案している。

「不確実」であることの共通理解を図りつつ、専門主義に陥らないことを肝に銘じ、この問題の解消に向け取り組むことが重要と考える。

文 献

- 1) 多屋勝雄. 現代の資源と漁業の管理. 「日本の水産業を考える—復興への道—」(倉田 亨編)成山堂書店, 東京. 2006; 99-101.
- 2) 川崎 健. 「漁業資源—なぜ管理できないのか—」成山堂書店, 東京. 2000; 137-145.
- 3) 藤垣裕子. 「専門知と公共性—科学技術社会論の構築へ向けて」東京大学出版会, 東京. 2003; 212-219.

^a Tel. : 81-3-3502-8111(ext) 6843. Fax : 81-3-3581-0326.
Email : yasuo_aoki@nm.maff.go.jp